いけない兄妹～義妹・麻里奈の柔らかい白い尻～　体験版

直輝／NAOKI

第一章

　突然、僕に妹が出来た。

　五年前に母が他の男と駆け落ちしてから父と二人暮らしだった。だが二ヵ月前、僕が高等部三年になった始業式の日に、いきなり父が再婚すると言い出した。

　新しい母親は美人で胸がでかい。尻もでかい。

　継子の僕にも分け隔てなく優しくしてくれるいい人だが、そのことはとりあえず置いておくとして、問題は母さんの連れ子、つまり僕の義理の妹の「麻里奈」だ。

　麻里奈は僕と同じ私立誠香学園の中等部三年生。

　すぐに僕になついていつも「にぃにぃ」とかわいい笑顔で甘えて来る。

　僕は一人っ子だから妹が出来てとてもうれしいんだが、麻里奈は、家ではやたら露出度の高い服ばかり着る。

　いつもミニスカートかショートパンツ履いてるし、最近暑くなってきたから上もタンクトップやキャミソール一枚で僕に纏わり付いてくる。

　女の子って発育早いといつも思う。胸がふくらみ始めて服の上からでもはっきりとわかるし、

ウエストもいっちょ前にくびれてるし、なんかもう女って感じがする。

　母も働いてるから家で二人きりで過ごすことが多い。

　ある暑い日のこと。学校から家に帰ると、シャワーを浴びようとバスルームに行った。

　服を脱いで何気なく洗濯かごを覗くと、小さく丸まった花柄の布が……。

　これって、もしかして……。

　震える手を伸ばし、手にとって広げてみると、麻里奈のパンティーだった。

　麻里奈は発育が良くって、胸も大きい。麻里奈の思春期の女の子の美しい姿態を想い出し、僕の心はたちまち妖しいときめきに支配された。

　短めの制服のスカートを履いて綺麗な脚を曝け出している可愛いその姿。肉付きのいい肉感豊かな腰つき。歩を進めるたびに、プリンプリンと揺れる大きな乳房と、ぷりっとしたお尻。麻里奈の服の下に潜むすべてが僕の淫らな性欲の対象となった。

（はぁ、麻里奈……）

　瞼の裏に焼きついた麻里奈のえっちな姿態を思い出すだけで、全身が異常に火照ってきた。唾液の分泌が激しくなり、股間への血流がいっきに増した。

　（ここに……麻里奈のあそこが……）

　僕にとってはいまだ未知のものである女性器を包み込んでいたパンティをじっくりと眺めた。

　わずかに残っていた理性をも壊されそうな激情がたちまち沸き起こり、欲望を貪るままに顔

を麻里奈のパンティに埋めた。

「あ、麻里奈……」

　女性器のあたっていたと思われる場所が濃い黄色に変色していた。僕は欲望に衝き動かされるままパンティを頬に近づけた。仄か薫ってくる麻里奈の匂い。

　その瞬間、我慢の限界を越えた。僕は身を震わせながら麻里奈のパンティを顔に押し当てた。

「ああぁ……」

　汗臭さと混じって、つんとした刺激臭が鼻孔を刺激した。これが思春期の女の子の匂いなのだと思った。

　僕のペニスは、もうぱんぱんに大きくなっていて、真っすぐ天井を向いていた。僕はそのまま、勃起したペニスを握ると、その手を上下に動かし始めた。

　僕は時々、小さく鼻を鳴らして、まるで小動物みたいな声を出した。

「あぁ…くぅっ、麻里奈…」

　手を動かすスピードが、どんどん早くなっていく。

　鼻に覆いかぶせた麻里奈のパンティーの匂いを嗅ぎながら、体を丸めて、必死にペニスを擦る。

「麻里奈……あぁ、くそぉ！　うぁっ、麻里奈、くうぅ！」

　我慢できなくなり、次第に手の動きが動きが激しくなっていく。ちぎれそうな位にペニスを握

って、思いっきり上下に擦っている。

「麻里奈、好きだっ！　あぁ、も、もう……ィっ、イクっ！」

　たまらぬ思いで、麻里奈のパンティを高々とそり返っているペニスに被せた。

「あああっ！　麻里奈！　出るっ！　あぁ、出るぅ！」

　烈しい性感が脳髄を貫いた瞬間、僕は大きく天を仰いで、麻里奈に向けられた欲望のすべてをパンティの中で爆発させた。

　ドク、ドク、ドク……。

　熱くて濃い精液が、麻里奈のパンティを突き破るかの勢いで噴射した。あたかも麻里奈の体内へ射精したかの快感が全身を駆け抜けた。

「くぅっ……」

　そのめまいを起こしそうな絶頂感、生々しい脈動が伴う射精感に、僕の身体は電気ショックにでも打たれたように痙攣した。

　股間の筋肉がキュッと収縮し、熱くて濃い精液が、麻里奈の穿き古したパンティを犯していた。

　最後の一滴まで搾り取るようにしごいた手が止まったとき、全身からすべての力が解き放たれたように抜け、がっくりと肩を落とした。

　顔が異常に熱くなり、耳鳴りがガンガンしていた。両手でパンティをそっと広げてみた。可愛

い花柄のポリエステル地の中に、生臭さが鼻につく黄色味がかった精液が大量に溜まっていた。

　オナペットと化した麻里奈の下着に付着した自分の体液を、僕は虚ろな目で見つめた。

　精液まみれの肉棒はにぶく光り、萎えきらない形状で性感の余震にピクピクとひきつらせていた。尖端からはまだ出きらない白濁液が流れた。

「ああっ、麻里奈……」

　深い溜め息とともに切なく呟いた。

「わあ、やっちまった！」

　人肌より温かく感じたその液体は、急激に冷めていった。僕は手を伸ばして、近くにあった箱からティッシュを何枚か取ると、素早くパンティーのクロッチの部分にべっとりとついた精液を拭き取った。

　シャワーを浴び終わっても、僕の胸は自己嫌悪感ではちきれそうだった。

　血のつながりはないものの、義理の妹の下着に欲情して恥ずかしいことをしてしまった。僕は頭を抱えながら居間のソファーに寝転んだ。

「ただいま」

　ちょうどその時、麻里奈が学校から帰ってきた。

「……お帰り……」

　リビングのソファーで寝込んでいた僕は麻里奈を出迎えた。僕は気まずくて妹の顔をまとも

に見られなかった。

「お母さん、ご飯作ってくれているかな……」

　麻里奈は冷蔵庫を覗きこんだ。その日は両親が親戚の家に行っていたので、家には僕と麻里奈の二人きりだった。

「作ってくれてる。レンジでチンすればいいだけだから楽ちん」

　そう言って、麻里奈は僕を見て可愛い顔で笑った。

　二人で簡単な夕食を済ませると、麻里奈が手早く後かたずけをした。

「私、部屋で宿題してくるね……」

「ああ」

　僕もしばらくして自分の部屋に向かった。麻里奈の部屋は僕の部屋の向かいにある。

　麻里奈の部屋の明かりが、ドアの隙間から廊下にもれている。

　僕は麻里奈の勉強の邪魔をしないように音を立てずに部屋に入ろうとした。その時……。

「……ハッ……」

　微かだが、麻里奈の口から声が漏れた。それから、布の擦れる乾いた微かな音がはっきりと聞こえてくる。

　僕はドアの隙間から麻里奈の部屋の中を覗いて息をのんだ。麻里奈がベッドの上に仰向けになり、両膝を広げている。麻里奈は頭を向こう側に、脚を僕の方に向けてベッドに寝ていたので、麻里奈の股間がはっきりと見える。

　仰向けに寝ている麻里奈の下半身が自然に目にはいった。手を股間に持ってきて、パンティーの中に入れ、もぞもぞ動かしている。

（……オナニーだ……）

　僕は今まで感じたことの無い、異常な興奮を覚えた。心臓の鼓動で麻里奈に気付かれるのではないかと思ったほどだ。

「……うぅ……は……」

　麻里奈のうめきがはっきり聞き取れるほど大きくなってきた。

　僕は興奮で荒くなった息を抑えるのに必死だった。

　麻里奈の右手がせわしなく動く、左手で両方の乳房を服の上から交互に揉みしだいていた。

「はっ……んっ……」

　手の動きが激しくなるにつれ、麻里奈の腰が痙攣するかのように仰け反る。

「は……は……うぅん……」

　麻里奈の部屋に湿っぽい音が響いている。回転するかのような麻里奈の指の動きが、白い太腿の奥の布に見える。きっと、クリトリスの包皮の上を指で刺激しているんだ。

「……はぁ……」

　麻里奈の口から大きく溜息がこぼれた。

「くちゅ……くちゅ……くちゅ」とリズムよく刻まれる微かな湿った音が、静寂を切り裂く大音響と

なって耳に響くかのように、僕の耳に鮮明に届いていた。

麻里奈は押し寄せる快感の波に首を振りながら悶えていたが、決して大きな声は発しなかった。僕には、その快感に必死に耐える顔と、耐え切れずに微かにもれた微かなうめき声に、さらなる興奮を覚えた。

僕は初めて見る女の子の自慰を間近で見る事の興奮に、このまま麻里奈の上に圧し掛かりたい衝動が湧き上がってきたが必死にこらえた。物音を立てないようにパンツの中にそっと手を伸ばし、自分の勃起したペニスをゆっくりと擦りはじめた。

「は……いぃ……は……あ……」

麻里奈の喘ぎは、途切れる事無く続き、下半身の動きに集中していた僕は、乳房を愛撫する麻里奈の左手がいつの間にかシャツをはだけさせ、乳房を露にしていることさえ気がつかなかった。

「ん……うぅ……ん……」

股間に伸びていた右手が疲れたのか、今度は左右の手が仕事を入れ替わり、右手が乳房を愛撫し、左手が股間に伸びた。

すでに陰裂は相当な愛液が溢れているのだろう。先程まで膣に触れていた乳房を愛撫する右手の中指は豆電球の明かりにきらきらと反射し、愛撫する乳首までもが妖しく濡れていた。

左手による刺激が新鮮だったのだろうか、立っていた両膝が左右に開かれ、乳房を愛撫す

る右手が右の乳房を鷲掴みにした。

「んんっ！」

　昼間なら、聞こえない程のうめきだが、この静寂の中ではかなり大きな声に自分で驚いたのだろうか、麻里奈は枕を左手に持ち、口を塞ぐ格好で胸の上に抱きかかえ、右手を股間に伸ばし、両膝をたて、又陰裂への愛撫をはじめた。

　僕は麻里奈の口からこぼれるかすかな喘ぎ声が聞こえなくなったことが残念だったが、興奮が冷める事はなかった。

「あぁ……あ……あぁ……」

　そろそろクライマックスが近いのか、枕で抑えてもはっきりと聞こえる喘ぎ声が聞こえる。

　間断なく右手は恥丘の上の動きまわり、時折腰が上下に跳ね上がる。

「あぁ……あ……いぃ……いく……いく……いく！」

　激しく腰が上に突きあげられた時、僕もパンツの中に射精していた。

「はあ……はあ……はあ……」

　枕で苦しかったのか、麻里奈はほぼ上半身裸状態で大の字になり、口を抑えていた枕を取ると、空気をむさぼるように吸いながら、絶頂の余韻にひたっていた。

　しばらくすると、ベッドの上からすうすうと、麻里奈の寝息が聞こえてきた。僕は静かに自分の部屋に戻ると、パンツを脱ぎ、麻里奈のオナニーシーンを思い出してペニスを扱き、また自分のパンツの中に射精した。

第二章

　翌日学校から帰ると、洗濯かごに麻里奈の脱いだパンティーを探した。そしてそれを発見して、僕は生唾を呑んだ。昨日の麻里奈のオナニー姿を思い出して勃起した。

　普段はまだ子供なのに、あんなにエロい顔をするなんて……。僕はたまらなくなってそのいちご模様のパンティーを部屋へ持ち込んだ。

　部屋にこもって買ったばかりの１８禁の美少女調教ゲームのエロ画像を見ながら妹のパンツに僕のペニスをこすりつける。

　まだ洗濯していない、妹のいちご模様のパンティーをペニスに装着した。麻里奈が一度履いたパンティーだからこそさらに興奮する。

　今いけない事をしてる。そう思うとますますペニスが固くなっていった。

　ここに麻里奈のオマンコが密着してたんだ……。

　二分が過ぎた。

「ああ……気持ちいい……で、でる……」

　僕は妹のパンティーを巻きつけたペニスを布の上から扱いた。

　ガチャ

「にぃにぃ宿題教えて！」

　あと一歩で射精すると思ったその時、突然妹が部屋に入ってきた。

「うわあ！　ま、麻里奈！　ノックしろっていつも言ってるだろ！」

　慌ててペニスをしまってパンツをズボンのポケットに隠す。

「だって、いいじゃない、兄妹なんだから。ねえ、何してたの？　にぃにぃ」

　妹は僕に近寄ってきてパソコンの画面を覗いた。

「わっ！　わっ！」

　妹はモニタのエロ画像を目を見開いてみている。

「何これ？　にぃにぃやらしー！」

「ちちち、違うんだ麻里奈！　これは友達が無理矢理押し付けて……」

　僕が慌てて妹をパソコンから引き離そうとしたら、足が絡まって妹をベッドに押し倒してしまった。

「うわっ！」

「きゃっ！」

　僕の身体が麻里奈の身体に覆いかぶさっている。

　あ……麻里奈の身体、暖かくて柔らかい……。

　膨らみかけの胸が当たってる……。

　なんかすごくドキドキして顔がカーっとなって、麻里奈のツインテールの髪の匂いを嗅いでみた。

　あぁ……甘くていい匂いだぁ……。

　昨日の麻里奈のオナニーを思い出して勃起してきた……。

　もう我慢出来ないよ。

「あん、にぃにぃ、どいて……重いよぉ」

　麻里奈の言葉なんかもう耳に入らなくなっていた僕は、デニムのミニスカに手を入れてパンツの上から妹の股間を触った。

「やん……にぃにぃ何するの！」

　指先に湿った感触が伝わって来た。

「麻里奈のここ、濡れてるじゃん……あの絵を見て濡らしてるのか？　女の子が縛られてセックスしてる絵を見て興奮するなんて、いやらしいな」

「いや……違うの、にぃにぃ」

　恥ずかしがる麻里奈。僕はパンツに手を入れて妹の割れ目を指で触れる。 初めて触れる女の子の性器……。

「すげ……ぬるぬるだ……」

「や……やぁん……」

　麻里奈が身体をびくんとさせる。感じてるんだ……。さすがオナニー好きなだけあるな。指を入れてみよう……。

「ひゃっ……」

「中もすごい……狭くて……熱くてひくひくしてるよ」

　そこで、僕はふと思った。

「麻里奈。お前、バージンじゃないのか？」

　麻里奈はトロンとした目を僕に向けた。

「当たり前じゃん。今どき中三でバージンなんていないよ」

「誰とやったんだ？」

「知らない……去年海に行ったときにナンパしてきた男の子」

　僕の心に強い嫉妬心が襲った。それと同時に、僕もこのまま麻里奈とセックスできるのでは

という誘惑にかられた。

　薬指に絡み付いてくる麻里奈のオマンコ……。もう入れたくてたまらない。

「ごめん麻里奈、僕……もう我慢できない……」

「あ……にぃにぃ、やめて……」

　僕はズボンを脱いでパンツから勃起したままのペニスを出して、妹の割れ目に押し当てよう

とした。が、場所がよくわからない。

「ねえ、麻里奈。この先、どうやったらいいの？」

「えっ？」

　麻里奈は驚いて僕の顔を見た。

「にぃにぃ、もしかして初めて？」

　僕は黙って頷いた。

「じゃあ……」

　麻里奈は僕の勃起したペニスをつまむと、自分の溢れる入り口にあてがった。

「このまま、腰を前に出して……」

「うん……」

　腰を押し出すと、ペニスの先端がすっと麻里奈の中に入った。

「はぁ……」

　僕は腰にぐっと力を込めた。ペニスが麻里奈の中へ入って行く。

　入れまいと抵抗する肉を押し分けて、少しずつ奥へと侵入させる。

「やだ……」

　麻里奈が目から涙を零している。でも僕自身も自分を止められない。

　僕はさらに力を込めてペニスを押し込む。ぬるっと僕のペニスが妹の中を侵してゆく。

　温かい。女の子の中ってこんなんなんだ。これで僕はもう童貞じゃない。

「ああ……」

　麻里奈が小さい喘ぎ声をあげた。感じてるんだ。白いシーツに麻里奈の愛液が染みを作った。

「にぃにぃの……バカァ」

　啜り泣く妹。

「ごめんな。でももう全部入っちゃったから……」

　これが麻里奈のオマンコ……すごくきつい。脈打ってるのがペニスに伝わって来る……。

「これから、どうしたらいい？」

「適当に……腰動かして……」

「じゃあ、動くよ？」

　僕はゆっくり腰を前後させる。

「あ……すごい……気持ちいい……」

「ああ……やん……あ……は……」

　やば……止まらないよ。

　だんだん腰が早くなってゆく。

「やん……にぃにぃ……動いちゃ……やあ……お腹きついよ……」

　歪んでいた妹の顔が、だんだん上気して息も荒くなってゆく。

　それを見るとますます興奮する。

　僕は初めてのセックスに有頂天になって夢中で腰を振りまくった。

　腹の奥から熱い物が込み上げてきた。このまま中へ出したい……。

「ああ……で……出る」

「やめて……にぃにぃ……赤ちゃん出来ちゃうよぅ」

「で、でも……。あああああっ！」

　妹の声にはっとした僕はペニスを膣から引き抜こうとしたが、間に合わず妹の中に射精してしまった。

「ひっく……いや……。にぃにぃのバカァ！」

「はあはあ……ごめん麻里奈！　本当にごめん！　僕、悪いにぃにぃだよね……」

　射精し終わると急に罪悪感が湧いて来た。僕は頭を下げて謝った。

　ああ……血が繋がってないとはいえ、妹とセックスしちゃったよ。

　僕達これからどうなるのかな……。

「べつに……ひっく……謝んなくてもいいよ。麻里奈もね……にぃにぃとエッチ……したかったの」

「え？　本当？」

　僕は驚いて麻里奈を見た。

「昨日、あたしが一人エッチしてるの見ながらおちんちんこすってたでしょ。あたしもにぃにぃとエッチするのを想像しながらイッちゃったの」

「し……知ってたのか、麻里奈」

「うん。だから麻里奈ね、本当は嬉しかったの。ちょっと乱暴だったからびっくりしちゃったけど……。でも、麻里奈がにぃにぃの初めての女なんだね。嬉しい！」

　そういって麻里奈が抱きついてきた。

「ねぇ、今度は優しくしてくれる？　そしたら許してあげてもいいよ」

　にっこり笑いながら抱き着いてくる麻里奈、す……すげーかわいい。

「じ……じゃあキスからな」

　キスよりセックスが先だったなんてかなり順序が逆だけど……あらたまるとすごく緊張するな。

僕は震えながら麻里奈の頬を手で包んで優しく唇にキスをした。

　女の子の唇って柔らかい……。

　キスしながら妹のキャミソールの紐を肩から外して、膨らみかけの胸を露出させ、両手で揉む。

「や……にぃにぃ、痛いよ……もっと優しくして……」

　そういえば女の子はおっぱいに触ると痛がるって誰かが言ってたな。

　僕は揉むのをやめて舌で乳首を舐めることにした。

「あん……くすぐったい……あ……い……」

　妹の声がなんだかエッチっぽくなった気がする。

「にぃにぃ……もう……お願い」

　妹が自分で性器を触りながらおねだりする。僕は妹の股間を覗き込んだ。

「見て……おマメがこんなにおっきくなったんだよ……」

　初めて見る女の子の性器。

「これがクリトリスだよ」といって、麻里奈が指で示す。妹のクリトリスは真っ赤に充血して固く勃起していた。

「にぃにぃ……私が舐めてあげるね」

　そう言うと、僕の足の間に座り込み、その小さな顔を股間にゆっくりと顔を近づけた。

「うわっ！　にぃにぃの、凄く大きい！」

　麻里奈は僕の大きなペニスを手にして目を上げた。僕の顔を見て微笑むと、そのまま口に含んだ。もちろん全て口に入るはずはない。長さは二十センチ近いし太さは妹の手首とさほど差がない。

　それでも亀頭の部分だけを大きく開いた口に含むと、ぎこちなく舌を使いはじめる。さすがに歯が当たるが、それもまた快感を誘う。

「麻里奈……気持ちいいよ」

「はむっ……ん……にぃにぃ……ほんと？」

「ああ。嘘を言うはずないだろ？　ホントに気持ちいいよ。」

「む……ん……あはっ……嬉しい……私が気持ちよくさせてるんだよね？　にぃにぃを」

「ああ、麻里奈……そうだ、次はおまえも気持ちよくさせてあげるよ」

　股の間でしゃがみ込んで私のモノを弄んでいる麻里奈を、シックスナインの体勢に移動させ、産毛のような陰毛に囲まれた割れ目に舌を這わせた。

「ん……あぁ……」

　感じているのだろうか？　さっき僕のペニスを迎えいれて開ききった陰唇から尿の匂いがした。小便臭いガキという言葉はホントなんだ。

　舌でゆっくりと舐めあげる。そう言えばフェラチオなんて事、何処で覚えたのだろう？

「こんな事、何処で覚えたんだ？」

「あう……彼氏に教えてもらった……」

「お前彼氏いたのか……？」

　僕は嫉妬した。多少頭に来たので、お仕置きも込めて、クリトリスを少しだけ強く舌で弾いてみた。

　一生懸命舐めていた僕のモノをぎゅっとつかみ、妹は口元から糸を引きながら体をのけぞらせた。

「あああっ……うっ……はぁ……」

「子供のくせに彼氏にフェラチオだなんて、生意気だ」

「うあぁ……くっ……はぁあああ……」

「どうした？　ごめんなさいは？」

「あああああぁぁ……ご……ごめんなさい……」

　お詫びのつもりもあるのか、また一生懸命私のモノをしゃぶり始めた。

「それじゃあ、オナニーはいつからしているんだ？　自分のアソコをいじって……いつ覚えたんだ？」

「んむ……ん……んふっ……あぁ……はぁ……小学校の……六年から……んっむっ……友達に教えてもらって……やってみたら、気持ちが良くて……んっむっ……」

　ふと、面白いことを思いついた。ちょっとしたイタズラ心だ。

「麻里奈……いつもやっているオナニーはどうするんだ？　やってみろ」

「え？」

　私は動かしていた舌を止めて小さな体を離した。

「やってみせてくれ」

「え……えっと……ん……は、恥ずかしいよぉ……」

　ちょっと恥ずかしそうな笑顔で私の顔を見るが、私のまじめな顔を見て本気だと分かったらしい。

「あんまり見ないでね……」

　見せろと言っているのにあまり見るなとはどういうことだ？　なんて事は言わなかったが、じっくりと鑑賞することにした。まずは自分の指を唾液でたっぷりぬらして股間に運ぶ。

　優しく唾液をそこに塗りつけると、割れ目を上から下までゆっくりと指を上下させる。それを繰り返しているうちに愛液がしみ出し始めた。

「ん……ん……はぁ……」

　声も上げはじめ盛り上がってきて、私のモノも大きく脈打ってきた。

「うぅっ、はぁん……！」

　妹はオナニーに没頭していた。クリトリスを刺激する指の動きがいやらしい。

「あひっ、あぁっ！　んぁっ……にぃにぃ……！　気持ちいい……」

　指で刺激されるクリトリスの下の小さな穴は、まるで飢えているかのようにビクビクと動い

た。

「にぃにぃ、にぃにぃっ……あぁっ！　どうしよう、イっちゃうかも……あっ、あっ……！」

「いいよ、いっても、麻里奈」

「あああっ、ああ、にぃにぃっ！」

　麻里奈は、指を膣に出したり入れたりしながら、器用にクリトリスもいじり倒す。

「にぃにぃ、気持ちいいよぅ！　あっ、あぁ、あぁんっ！　あああっ、にぃにぃ！　にぃにぃ、好きっ、ああ、イクぅ！　ぅあっ、あああぁぁんっ！」

　絶叫と共に、強ばっていた妹の体から、フッと力が抜けた。

　麻里奈のオナニーショーは終わった。

「いつもはこんな感じだよ……」

　妹は恥ずかしそうに僕の顔を見た。

「そうか。気持ちよかったか？」

「うん……気持ちよかったよ……」

　さらに恥ずかしそうに顔を赤らめる麻里奈を見てまた強く抱きしめた。

　麻里奈の表情は恍惚として、すでに女の顔になっていた。

　もう頭は回っていないようだ。放心状態に近い。義理の兄にオナニーを見せて感じてくれるとは、嬉しい限りだ。

「もっと気持ちよくさせてあげるからな。」

中三のくせに胸の膨らみは僕の同級生も顔負けなくらい発達している。

それに、自己主張するように乳首は立っているので、次はここを攻めることにした。

キスをしながら首筋から胸まで、ゆっくりと愛撫していく。そのまま乳首を弾いた瞬間

「んはあああぁぁぁ……」

胸が結構感じるようだ。また一つ勉強になった。麻里奈の身体から力が抜けていくのが分かった。

「どうだ？　気持ちいいか？」

「あぁ……はぁ……はぁ……気持ちいい……」

僕はもう片一方の乳首を責める。一度射精しているからか、二度目は妙に落ち着いていると思った。

「ここは気持ちいいか？」

「はぁ……あ……あぁ……はぁ……うん……すごく気持ちいいよぉ……」

豊かな乳房の割には幼い乳首は少年と変わらない大きさで、乳輪もとても小さい。次はその小さな乳首にキスをした。優しく舐めると深いため息のような喘ぎ声をあげる。

「んあ……はぁぁぁぁぁぁ……」

強く吸い上げて少し歯をたててみた。

「……っきゃうあぁあああぁぁ……」

反応が面白い。ＡＶ女優のように、作った声は出さない。感じたままの声を出している。

　僕に抱きつく力も弱くなってきた。相当感じて来ているようだった。できればもう一度イかせてやりたい。やっぱりここは……

「麻里奈……仰向けになって両足をたててごらん」

「あ……ん……こう？」

「そうだ、それで足を両側に開くんだ。」

　素直に従って、Ｍの時に足を引くと、ぴったりと閉じていた割れ目は少しだけ開きやすくなった。これまでの愛撫で、麻里奈のそこはもう完全に濡れていた。

「麻里奈……もうこんなに濡れているよ？　おもらしでもしたのか？」

「ち、違う違う！　そんなことないよぉ……」

「ほら、見てみろ。こんなに濡れてるぞ」

　愛液を指にすくい取り、麻里奈の顔の前に持っていく。すると、顔を真っ赤にして

「そんな事言わないで……だって……にぃにぃが気持ちいいことするから……」

「なんだ？　にぃにぃのせいにするのか？」

「そ、そんなことないよ……ああっ！」

　一気に麻里奈の閉じた陰唇を開き、強く吸い上げた。

「あああ！　気持ちいい！　あああああぁぁぁぁぁ……」

　そのまましつこいほど口と指で幼い陰部を責め立てる。膣口は、小指の先ほどしかない。こうやってじっくり見ると、挿入は不可能のように見える。無理矢理挿入すれば出血が止まらい

のではないかというくらいだ。こんな小さい幼い孔に、僕の太いペニスが入ったのだ。これまで男のモノを銜えこんできたなんて信じられなかった。

　でも、僕は麻里奈を愛し、抱いているのだ。これから先、このような機会は何度もある。今日は、僕とのセックスでも気持ち良くなれるということを身体で分からせてあげようと思った。

「どうだ？」

「あはぁ……き……きもち……よぉ……」

「それじゃ、こんなのはどうだ？」

　私は肛門を指でなぞった。

「はぅあああぁぁぁ！　は……あ……」

「気持ちいいか？」

「あ……あぁ……きた……ない……よ……」

「汚いもんか。可愛いくて綺麗な麻里奈のお尻の穴、もっといじってあげるよ」

　足を持ち上げ、小さな白いお尻が私の顔の当たりに来るようにして、小さなつぼみのようなその穴を舐めた。

「ああ……あぁ……あああぁぁぁ……」

　そろそろオーガズムが近づいてきたようだ。指でクリトリスを優しく刺激しながら、舌を肛門に突き入れた。

「きゃあぁぁ……はぁあああああああああ……」

　可愛い妹のお尻の穴を汚いとは全く思わない。その小さな身体全て、何処も汚れた所など無い。

「どうだ？」

「あぁ……あぁ……へん……」

「何がへんなんだ？」

「あぁ……な……なんか……へんなかんじ……がする……よ……あはぁっ……」

「もうそろそろイきそうなんだな？」

「はぁ……わかんないよぉ……あああああ」

　僕は麻里奈を片手で抱き上げもう一度深いキスをしながら、もう片手をお尻の穴に突っ込み、僕のモノは、素股のような形で腰を動かし、麻里奈のクリトリスに強い刺激を与えた。

「あ……あ……な……なに……？」

「いいんだよ。イっても」

　優しい声で耳元にささやく。

「は……は……はっ……はっ……はっあ……あ・あ・あ・あああああああ」

　もう一度キスをして、指の動きを速めた。そのとき……

「ヒッ！　いやぁあああああああああああああああああああ！」

　麻里奈はついにオーガズムを迎えたようだ。

　強く麻里奈を抱きしめながら今までで、一番長く、深いキスをした。とは言え、麻里奈の意

識はほとんどなかった。失神に近い状態で、目の焦点も定まっていない。しかし気が付くまで、そのままの体勢で抱きしめ、キスし続けた。

「にぃにぃ……？」

「麻里奈。どうだった？　よかったか？」

「なんか……よくわかんなかったよ……でも、気持ちよかった……」

　上気した顔が微笑んだ。この顔を見て、後悔するのは絶対に止めようと誓った。このまま愛し合い、一生そばにいようと思った。離したくないと思った。

「麻里奈……大好きだ。愛してるよ」

「にぃにぃ……私もにぃにぃが大好き。愛してるよ……」

　そう言って、麻里奈は目を閉じる。激しいオーガズムを味わったのだ。体力を相当消耗したのだろう。

「僕もおちんちんまた固くなったよ……もう入れたくてたまらない」

「いいよ、にぃにぃ、来て」

　麻里奈がベッドに仰向けになって股を大きく開く。

　僕は再び妹の膣に突き立てる。今度は抵抗なく奥まで入れることが出来た。

「じゃあ動くよ。今度は麻里奈が気持ちよくなるまで我慢するからね」

「うん、麻里奈を気持ちよくして、にぃにぃ」

　またゆっくりと妹の中で動き出す。やっぱり麻里奈のオマンコはすごくきつい。

　麻里奈はさっきよりは痛みが少ないみたいで、僕の動きに合わせるか細い声で鳴いている。

「あ……あ……あん……ふぁ……」

　その声を聞いていると、なんだか無性に、もっと激しく膣を掻き回したい気持ちになった。

「いくぞ、麻里奈」

「え？　にぃにぃ？　ちょっ……待っ……や……あ……」

　スマン麻里奈、僕はもう止まらない……止められないんだ！

　それほどまでに麻里奈の膣は気持ちいいんだ。

「あん……は……あ……や……なんか来る……なんか来るよぉ……怖いよ……にぃにぃ……」

「大丈夫……僕がついてるから……大丈夫だよ麻里奈」

　僕は激しくピストン運動しながら麻里奈のクリトリスをキュッとつまんだ。

「いやぁ……何……あああん……にぃにぃ……お兄ちゃぁぁぁん……」

「麻里奈……麻里奈……」

　あああ、またイク……。

　夢中で麻里奈にしがみ付き、腰を振って妹の身体の中で射精した。

　麻里奈は全身をがくがく震わせながら肩で息をしている。

　イッたのか？さっきと違って気持ち良さそうにしてたし……。

　僕はベッドに倒れ込み、麻里奈の髪を撫でながら大きく深呼吸した。

「いったのか？」

　肩で息をしている妹の耳元でそっとささやくと、彼女は黙って頷いた。

「気持ちよかったぁ」

　麻里奈は気だるそうに身体を起こした。

「あーん、にぃにぃの精液であそこがべとべと……」

「悪い、今度は……その……ゴム着けてしよう……」

「うん、約束だよ。あ、それからにぃにぃが使ってたあたしのパンツ返してね」

「うおっ！」

　ばれてた……。

（いかがでしたか？　体験版はここまでです。本編をご購入いただけると嬉しいです）